

コリント人への手紙第二11章 「愚かさに合わせた弁明」

1A 偽使徒たちの正体 1-15

1B 処女が汚される心配 1-4

2B 偽使徒への対抗 5-15

1C 大使徒とのつながり 5-6

2C 報酬による誇り 7-12

3C サタンのしもべ 13-15

2A 皮肉の自慢 16-33

1B 愚かな議論 16-21

2B 偽使徒たちとの比較 22-29

1C ユダヤ人の出自 22

2C キリストのしもべの受ける苦しみ 23-27

3C 教会への心づかい 28-29

3B 弱さの誇り 30-33

本文

コリント人への手紙第二 11 章を開いてください。私たちの学びは、コリント人への手紙第二の最後の部分を見えています。これまでのコリントの教会の問題の背後にいた、偽物の教会指導者らをパウロが暴いていくところを見えています。とても生々しい話になっています。主イエスが地上におられた時から、使徒たちの時代、そして今に至るまで存在している問題です。偽教師たちが教会に忍び込み、信者たちを食物にしているという問題です。教えにおいても、行いにおいても、あってはならないことを行っています。

イエス様は、「彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。」と言われました(マタイ 7:15)。また、「やもめたちの家を食い尽くし、見栄を張って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けます。」とも言われています(マルコ 12:40)。パウロは、ローマにある兄弟たちにも、「そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。(16:18)」と言っています。ペテロは第二の手紙で偽教師のことを警告し、ヨハネは三つの手紙で反キリストであると糾弾しています。そしてユダの手紙にも偽教師を暴いています。

このような者たちが、どのようにしてだましているのでしょうか？今、読んだロマ 16 章には「純朴な人たち」とありました。純朴であるし、またコリントの人たちは「キリストにある幼子」(I コリ 3:1)とあります。パウロは、11 章においてコリントの人たちが、偽教師たちによって、キリストに対する

貞潔が汚されてしまうのではないかと心配しています。私たちは、ここから、偽物と本物の違いを見ていくことができるでしょう。パウロの、神の情熱によるコリントの人たちへの愛も見ていくことができます。

1A 偽使徒たちの正体 1-15

1B 処女が汚される心配 1-4

¹ 私の少しばかりの愚かさを我慢してほしいと思います。いや、あなたがたは我慢しています。

パウロは、10章において、誇りについてじっくりと話しました。神が恵みによって、自分たちの限度内で誇ることは良いことだと述べていましたね。主によって、人々が救われたということをつかち合うこと、愛と信頼をもって他の人々のことを誇ることなど、健全な誇りがあります。けれども、肉による誇りは愚かなことです。12節でこう言っています、「私たちは、自分自身を推薦している人たちの中のだれかと、自分を同列に置いたり比較したりしようとは思いません。彼らは自分たちの間で自分自身を量ったり、互いを比較し合ったりしていますが、愚かなことです。」肉によることで、同列に置いたり、比較したりすることは、あまりにも愚かしいことです。神の恵みの働きの中には、あまりにも異質なことです。

しかし今、パウロは、そのようなことを行っている者どもがコリントにいて、パウロの人格や評判を引き落としています。あまりにも低次元のことなのですが、それでも対処しなければいけなくなりました。それをパウロは、「私の少しばかりの愚かさを我慢してほしい」と言っています。自分の働きを、彼らの次元で弁明しなければならなくなりました。強いられて自分自身を弁明していくのです。箴言には、「26:5 愚かな者には、その愚かさに合わせて答えよ。そうすれば彼は、自分を知恵のある者と思わないだろう。」とあります。彼らの愚かさに合わせて、パウロはこれから、自分のことを弁明していきます。

² 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。³ 蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。

コリントの第一と第二に貫かれているパウロの情熱は、彼が長い期間をかけて、コリントの人たちを手塩にかけて育てたということ、息子や娘を育てる父親のような思いです。「1コリ 4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人いても、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」と述べていました。そして午前礼拝でお話ししましたように、ここの「熱心」という言葉は、「妬み」とも訳すことのできる言葉です。パウロは、彼らが何とかして、キリストの花嫁として、キリストの戻って来られる日まで

に、その貞潔が守られることです。キリストご自身に対する真心と純潔が保たれて行くように、という切なる願いです。しかし、サタンが偽使徒たちを通して、彼らの思いを汚していています。このことがとても心配なのです。

⁴ 実際、だれかが来て、私たちが宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいは、あなたがたが受けたことのない異なる霊や、受け入れたことのない異なる福音を受けたりしても、あなたがたはよく我慢しています。

イエスという名を使って宣べ伝えている。霊が与えられて、例えば異言を語っている。福音と呼ばれるものがある。そういったことがあるからと言って、同じイエス、同じ聖霊、同じ福音とは限らないのです。同じ言葉を使っている、まるで違うということは多々あります。ガラテヤ人への手紙にも、その教会に忍び込んできた偽教師たちについて、「福音といっても福音ではない」ということを言っています。「ガラ 1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたを動揺させて、キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。」福音という言葉を使いながら、その性質が変わって行ってしまうという恐ろしいことが起こります。イエス様は、主よ、主よ、と言っている者が天の御国に入れるということではないことを語られました(マタイ 7:21-23)。主の名を唱えているからといって、同じ主だとは限らないのです。

私は救われてから、大学生の時に熱心になってきました。けれども、いつの間にか、熱心のための熱心のような状況に変えられてしまっていたようです。もっと、何か大きな神の働きがないか？という、新奇なものを求めていたと思います。カルバリーチャペルは、イエス革命と呼ばれる若者のリバイバルが起こっているところだと聞きました。私と妻は、アメリカに引っ越し、カルバリーチャペルに通うようになりました。ところが、当時、グレッグ・ローリーさんの伝道集会在毎週、教会でありました。彼は、「あなたは罪人です。悔い改めてください。」というメッセージを語っています。私はいつしか、心が暗くなってきました。私のことをそうやって否定しないで下さいよ、という思いになっていたのです。けれども、隣に座っている若いお姉さんは、エキサイトして聞いています。その後も、教会で、愛がない、冷たいとも感じたことがあります。

教会が冷たいのではなく、分かってきました、私自身が、キリストの福音から離れていたからです。自分が認められることが愛であり、自分というものを持って、それが受け入れられることが愛だと思っていたのです。そうではないですね、自分自身を捨て、キリストに満たされるところに、私たちの喜びがあります。そこで、私は、一からキリストとの歩みを学び直さないといけないことに気づきました。初めに聞いた福音とは何なのか？ということです。こうやって、いつの間にか福音の内容が変わってしまい、行いによる救い、自己受容、自己実現の手段となっていたところを、悔い改めに導かれました。そうして、自分を捨てることの喜びが戻ってきたのです。

そして、「あなたがたはよく我慢しています。」と、少し皮肉を込めて話しています。本来なら、我慢などする必要がないのです。そういった異端の教えを持ち込む者たちから離ればよいのです。ローマ 16 章 17 節には、「あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。」とあります。なのに、偽使徒たちに癒着してしまって、遠ざかることができないことを、「我慢しています」と皮肉を込めて言っているのです。

2B 偽使徒への対抗 5-15

1C 大使徒とのつながり 5-6

⁵ 私は、自分があの大使徒たちに少しも劣っていないと思います。

「大使徒たち」とは、ペテロとヨハネ、そしてイエス様の肉による兄弟、といっても半兄弟ですが、ヤコブの辺りでしょう。これら偽使徒たちは、自分たちがこれら大使徒たちからやって来たという、かなり怪しいお墨付きを得ていたのではないかとと思います。当時の、聖霊によって始まった教会は、その管理においてはそれほど厳しいものではなかったような気がします。初めて、異邦人主体の教会が、アンティオキアに建て上げられた時に、「使 15:1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。」とあります。エルサレムの教会で、このことが激しい論争になり、ペテロがまず語り、パウロの証言する、異邦人の救いを擁護します。彼自身が、コリネリウスの聖霊のバプテスマを目撃したのですから。そして、ヤコブが立ち上がります。そして聖霊と教会によって、異邦人を悩ませないという決議が出ました。その後、パウロとバルナバに手紙をたくします。そこにこう書いています。「使 15:24 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。」そういった者たちが、コリントに来たのだと思われます。

大使徒たちとパウロの間には信頼関係があり、優劣を競うこと自体、全くもって愚かなことです。尊敬というものは、愛の中ではぐくまれていくものであり、互いを敬い、互いに仕えていくものです。ガラテヤ書は、まさにこれらユダヤ主義者らを論駁している手紙なのですが、パウロはこう話しています。「2:6 そして、おもだった人たちからは——彼らがどれほどの者であっても、私にとって問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません——そのおもだった人たちは、私に対して何もつけ加えはしませんでした。」キリストにあって、恵みによって一つなのです。対等な付き合いなのです。これを、大使徒とのつながりを振りかざして、パウロを上から目線でこき下ろし、マウンティングをかけているのが、これら偽使徒たちの特徴でした。

⁶ 話し方は素人でも、知識においてはそうではありません。私たちはすべての点で、あらゆる場合に、そのことをあなたがたに示してきました。

話し方について、コリントの人たちはギリシア文化の中に生きていて、そのことをとても気にしていました。雄弁さというのが、内容の知識と同じように、いやそれ以上に重要だったのです。しかし、それはパウロが、敢えて雄弁さや話しぶりに頼らずに語っていたところが大きいです。十字架につけられたキリストを宣べ伝え、説得力のある知恵のことばを使わなかったことを第一コリントで述べています(2:2-5)。それは、信仰が人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだと言っています。

知識についてですが、パウロは、エリートです。ガマリエルのもとで学び、律法については非の打ちどころのないほどそれを知り、実践していたことを彼は、ピリピ書で語っています。彼は、福音を解き明かす時に、いわゆるユダヤ教のラビが教える時のように、律法を駆使して、また彼らに分かり易いように、ギリシア人やローマ人の考え方も取り入れて、語っていきました。再び言いますが、こんなことを語るということ自体が、愚かなことですね。キリストにある純真さが大事なのであって、知識が云々、全くもって関係のないことです。けれども、そういったことが試されているので、ここで弁明せざるを得なかったのです。

2C 報酬による誇り 7-12

⁷ それとも、あなたがたを高めるために自分を低くして、報酬を受けずに神の福音をあなたがたに宣べ伝えたことで、私は罪を犯したのでしょうか。

パウロは次に、自分が彼らから報酬を受け取っていなかったことについて、何かやましいことがあるからだ、あるいは使徒としての資格がないなどと言われていたことに対して応答しています。パウロは、「あなたがたを高めるために自分を低くして」と言っていますが、第一の手紙で、なぜ報酬を受け取らなかったのかをじっくりと説明していました(9章)。彼は天幕作りをして、自分の生活費を工面していたのですが、彼らからは給料を受け取りませんでした。それは、コリントにいる偽使徒たちのように、自分たちの腹を満たすために献金を強要する者たちがいたからです。本来は、福音宣教者として彼らから物質的な支援を受け取ることは権利であったのですが、福音を語る時に、お金を巻き上げるという悪習慣があったので、それをあえて避けていたのです。しかし、今の慎重さと知恵がかえって、パウロが資格がないから引け目を感じて、受けとっていなかったのだとか言われていたのでしょう。パウロは、福音が広がるために、当然ある権利を行使せず、自らを低くしていたのですが、それがかえって、彼の使徒職が疑われる理由の一つとなりました。

⁸ 私は他の諸教会から奪い取って、あなたがたに仕えるための給料を得たのです。⁹ あなたがたのところにて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニアから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたからです。私は、何であれ、あなたがたの重荷にならないようにしましたし、今後もそうするつもりです。

「奪い取って」給料を得たというのは、もちろん皮肉の表現であり、他の諸教会の人たちは自ら進んで、パウロに支援金を渡していました。マケドニアから兄弟が来たとありますが、ピリピの町はマケドニア地方にあります。それで、パウロは彼らに感謝の手紙を書いていて、それがピリピ人への手紙です(4:15)。彼らは、迫害の中で貧しいにもかかわらず、それでも支援していました。そして、これからも負担をかけないと言っています。しばしば、善を仇で返すという言葉がありますが、コリントの人たちは、自分がどれほど愛されていて、パウロたちの働きによって守られていたか、その自覚がなかったのだと思われます。愛されていること、恵まれていることを自覚していなかったのです。うわべでパウロのことを見て、裁き、偽使徒たちの横暴に対して盲目にされていたのです。

¹⁰ 私のうちにある、キリストの真実にかけて言います。アカイア地方で私のこの誇りが封じられることはありません。¹¹ なぜでしょう。私があなたがたを愛していないからでしょうか。神はご存じです。

「誇り」とは、パウロが真正な福音宣教者であるということの誇りです。彼ら、偽使徒たちのように欲望の虜になること、またそのような者たちと一緒にされて尊厳を失うことをしたくない、という誇りです。けれども、コリントの人たちは、そうやって彼らに負担をかけさせないことを、「パウロは、私たちから距離を取っている。愛していないのだ。」と思うかもしれません。いいえ、違います、彼らを愛しているからこそその、知恵のある判断です。

¹² 私は、今していることを今後も続けるつもりです。それは、ある人たちが自分たちで誇りとしていくることについて、私たちと同じだと認められる機会を求めているのを断ち切るためです。

偽使徒たちは、コリントの人たちから給与を得ていたのです。「パウロが給与を得てきたが、我々は今、得ている。これで正式にコリントにおいて我々が指導者であることが認められたのだ。」というような自己推薦を絶対にさせないと、パウロは心に決めていたのです。

3C サタンのしもべ 13-15

そして 13 節から 15 節で、彼らの正体をずばり暴きます。

¹³ こういう者たちは偽使徒、人を欺く働き人であり、キリストの使徒に変装しているのです。¹⁴ しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します。¹⁵ ですから、サタンのしもべどもが義のしもべに変装したとしても、大したことはありません。彼らの最後は、その行いにふさわしいものとなるでしょう。

はっきりと、「サタンのしもべども」と彼らのことを呼んでいます。霊の戦いなのです。霊の戦いにおいて、教会の中にも偽使徒、キリストの使徒に変装するという形で現れるということもあります。ペテロの第二の手紙で、「2:1 しかし、御民の中には偽預言者も出ました。同じように、あなたがた

の中にも偽教師が現れます。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込むようになります。自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し、自分たちの身に速やかな滅びを招くのです。」という警告があります。また、ティアティラの教会において、イゼベルという女預言者がおり、彼女が、主のしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせて、偶像に献げたものを食べさせている、とあります(2:20)。神の教会の中に、キリストの使徒、キリストの預言者に変装して、滅びをもたらすというサタンに仕業があるのです。

ここで大事なのは、サタンは「光の御使いに変装します」ということです。サタンが、真っ黒な槍を持っているイメージは払拭してください。蛇がエバを惑わした時に、それがいかに魅力的だったのか、光の御使いのような恰好をしてやってくるのだということを忘れないでください。「滑らかなことば、へつらいのことば(ロマ 16:18)」をもって、だますのです。なぜ、騙せるかと言いますと、その言っているすべてのことが嘘だったら、騙すことができません。真実を大方語り、その中に嘘を一滴、二滴だけ入れておけばいいのです。すると、全体が偽物に変質しますから。

そして、主ご自身も、使徒たちも共通して語っているのが、彼らの最後は定められているということです。必ず裁かれます。「彼らの最後は、その行いにふさわしいものとなるでしょう。」と言っています。私たちはこのことを信じて、そのような偽りの行いをしている者たちについて、神の平安で守られるべきですね。ロマ 16 章で、こう励ましています。「16:19-20・・・なお私が願うのは、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあることです。20 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。・・・」

2A 皮肉の自慢 16-33

1B 愚かな議論 16-21

¹⁶ もう一度言いますが、だれも私を愚かだと思わないでください。もし愚かだと思うなら、愚か者として受け入れてください。そうすれば、私も少しばかり誇ることができます。¹⁷ これから話すことは、主によって話すのではなく、愚か者として、自慢できると確信して話します。¹⁸ 多くの人が肉によって誇っているので、私も誇ることにします。

ここに、パウロが、これら偽使徒たちと自分を肉の領域で誇ることを、強いられるようにして行おうとしている言葉が始まっています。肉を誇ることは、愚かであります。けれども、律法主義を振りかざす人たちは、実は、自分が強調している律法でさえ、どんな意味なのか、それはどういう目的なのかを分かっていないのです。イエス様が、パリサイ人たちを、偽善者だと言われて、モーセでさえあなたがたを裁くということを言われました。

教会においても、あることをことさらに強調し、それを行っていないことを教会の中で批判し、裁く時に、実は自分自身ができていることを引け目に感じていて、その引け目を補うために過度に

強調しているのです。けれども、実際には、行っているけれども、それをあまり強調しないのは、すでに行っていて、それは神の恵みによるものだから、ことさらに言うまでもない、ということなのです。例えば、「この教会では貧しい人たちへのアプローチがない！」とかいって、実はその教会は長年のこと、ホームレスへの働きかけをしていて、あまりにも定着しているので、ことさらに宣伝していないとか。けれども、そういった声が大きくなってきたらどうするか？パウロのように、強いられるようにして弁明しなければいけなくなる時があります。

¹⁹ あなたがたは賢いので、喜んで愚か者たちを我慢してくれるからです。²⁰ 実際あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかれても、我慢しています。²¹ 言うのも恥ずかしいことですが、私たちは弱かったのです。何であれ、だれかがあえて誇るのなら、私は愚かになって言いますが、私もあえて誇りましょう。

この言葉は、ものすごく皮肉を込めていますし、教会で起こっていることがいかに異常であるかを、あてこずっています。コリントの人たちを「賢い」と言っていますが、それは、こうした愚かな議論に付き合うぐらいの賢さがありますね、と言っているのです。もちろん、このような偽使徒たちを当の昔に排除しているのが真の賢さですが、それを逆に皮肉を込めて言っているのです。

そして、彼らが行っていることを見て見ましょう。「奴隷にされて」る、と言っています。これは、律法主義によって規則にがんじがらめにされている、という意味でしょう。また、モーセの律法でなくとも、彼らが決めた掟があって、それにがんじがらめになっているということです。「食い尽くされても」と言っていますが、これが、彼らのものを、金銭を絞れるだけ搾り取っているということです。カルト的な教会に行っている人は、このこと自体に気づいていません。自分は主のために働いているのだから、と思っています。それをやめると、主に罪を犯しているのではないか？という罪責感が出てきます。だからやめられないのです。そして、「強奪されても」というのは、自分たちが持っているものまでも奪い取られるということです。所得だけでなく、たとえば持ち家とか。あるいは、自分の安定した仕事であるとか。そして、「いばられても」というのは、マウンティング、モラハラ、パワハラなど、あらゆる抑圧的な言動です。そして、「顔をたたかれても」とあるように、暴力行為にも及んでいます。これも、何か叱責を受けている、愛されていると思込ませて叩くのです。

そして、「私たちは弱かった」とパウロは、言っています。これも皮肉を込めています。パウロは、彼らに金銭的に一切、負担をかけませんでした。彼らが圧を感じることはないように、パウロは指導する時に細心の注意を払いました。自分を低くしました。そうやってきたのを、コリントの人たちはパウロは弱いとして見下げていたのですから、それで自分のことを弱い、とパウロは言いました。

2B 偽使徒たちとの比較 22-29

そして、これから肉を誇るようなことを言いますが、かなりひねりがあります。その肉の誇りでさ

えが、実はどれだけ苦しみを受けてきたか、という成功物語とは正反対のことなのです。パウロは、徹底的に恵みの内に留まっていた。決して、主のなされた恵みのわざを自分のものとして誇りませんでした。知られて弁明することが、苦しみの中にいたことなのです。

1C ユダヤ人の出自 22

²² 彼らはヘブル人ですか。私もそうです。彼らはイスラエル人ですか。私もそうです。彼らはアブラハムの子孫ですか。私もそうです。

偽使徒たちは、自分たちがユダヤ人であることを誇っていました。このキリストの福音が、ユダヤ人をルーツとし、かつ、世界に散らばるユダヤ人ではなく、ユダヤ地方にいるユダヤ人から始まっているということを、彼らは自称していました。つまり、オリジナルの者たちなのだとしたことなのです。そうすると、コリントの人たちは、「ああ、これこそが真正な教えなのだ。パウロたちの教える恵みの福音は、オリジナルから外れている歪んだものなのだ。あるいは二級の教えなのだ。」と思ったことでしょう。しかし、もちろんパウロ自身は、きつすいのユダヤ人であり、出身はキリキアのタルソであるものの、エルサレムでガマリエルの門下生であり、ばりばりのパリサイ派、ヘブライ文化を持ち合わせたユダヤ人です。今のユダヤ人もそうですが、自分がユダヤ人であることさえ意識が薄いユダヤ人も多い一方で、伝統を頑なに守るエルサレムにいるユダヤ人もいます。

ピリピ人への手紙でも、こうしたユダヤ主義者に対して反論しています。その時に、パウロは、「肉体だけの割礼の者に気をつけなさい。神の御霊によって礼拝し、イエス・キリストを誇り、肉に頼らない私たちこそ、割礼の者なのです。(3:3)」と言っています。そうですね。

「ヘブライの宝もの」という、いのちのことば社出版の本を下さった方がいました。著者のランデルマン真樹さんです。牧師の娘として生まれ、留学をイスラエルで行い、ヘブライ聖書の勉強をしました。そこで、イエス様を信じるユダヤ人であるランデルマンさんと結婚しました。今は、アメリカに移住して、ご家族でカルバリーチャペルに通っておられますが、彼女はまさに、オリジナルのヘブル語を習得し、イスラエルで育ち、お子さんたちはヘブル語が母国語です。

しかし、彼女のオンラインのセミナーに参加しましたが、とても謙虚にこう言われていました。「ヘブル語で読まない、聖書は理解できないということではない。原語が聖いのではなく、主の語られるメッセージが聖いのだ。聖書を読む時は、聖霊さまが私たちに理解できる力を与えてくださる。(ヘブル語で)神秘的な意味を探しても、それは見つからないと思う。深みは味わえるが、根本的な救いは変わらない。」と言われていました。¹とても謙虚な立場です。ユダヤ人のルーツをもってして、霊的になるのではありません。イエス・キリストを誇り、御霊による礼拝こそが、真の知識に至るのです。

¹ https://youtu.be/_E1EvAYcA0

2C キリストのしもべの受ける苦しみ 23-27

²³ 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。

キリストのしもべであることを、彼らは誇っていたのですが、パウロはひねりを入れて、「彼ら以上にそうです」と、言っています。それは、キリストのゆえの苦しみが尋常ではないからです。ガラテヤ書に出てくるユダヤ主義者らに対して、パウロはこう述べています。「6:12 肉において外見を良くしたい者たちが、ただ、キリストの十字架のゆえに自分たちが迫害されないようにと、あなたがたに割礼を強いています。」肉における外見を良くしたいという思いから、あなたがたに割礼を強いているのだと言っています。十字架を宣べ伝えるならば、その人は罪に定められていることを教えることです。そして、悔い改めて、ただ神の憐れみによってのみ、罪が赦されることを信じることです。ですから、肉は神に逆らいます。自分を良く見せたいからです。それで十字架を宣べ伝える人々を迫害するのです。パウロは、割礼による肉における傷ではなく、背中に打たれている傷を、「この身にイエスの焼き印を帯びている。」と言っています(ガラテヤ 6:17)。

²⁴ ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、²⁵ ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

使徒の働きで見ると、パウロが受けた迫害は、彼の受けた迫害のごく一部であることが分かります。ピリピにおいて、ローマの役人からむちを受けたことがあるのは記録されていますし、カイサリアからローマに向かう船が遭難しかけたことも書いてありますが、それ以外のことは、ここにしか書いていません。ちなみに、ユダヤ人によるむち打ちは、申命記 25 章 2-3 節に書かれています。卑しめを受けないために、40 に一つ足りない鞭にしなさいと命じられています。

²⁶ 何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、

パウロの受けた苦しみは、迫害だけではありませんでした。彼は、宣教のための旅を他の使徒たちよりも広範囲にした人です。私は、トルコとギリシアの旅行で、東はシリアのアンティオキアから、西はアカイアのコリントまで見ました。アンティオキアから、エーゲ海沿いのアジア地方に行くまでの旅程は、バス旅行でもとてもきつと感じました。峡谷があり、山の道もあり、過酷です。そして、そういったところに盗賊がよく現れました。また、悪意をもった者たちが、異邦人にも、ユダヤ人にもいました。そしてやっかいなのは、キリストにある兄弟を装った偽兄弟もいました。荒野でそういった目にあっただけでなく、海上、船の上でも盗賊のような者たち、恐喝する者たちがいました。

²⁷ 勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。

貧しさ、飢え渴きも経験したようです。着る物も少なく、その中で凍えそうになったこともあります。

3C 教会への心づかい 28-29

けれども、これら様々な労苦の中で、パウロの心を大きく占めていたのは、次のことです。

²⁸ ほかにもいろいろなことがあります。さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。²⁹ だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまずいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか。

パウロは、これらのとてつもない苦労がある中で、それでも最も気にしていたのは、教会のことだったのです。そこで起こっている問題について、気が気でならなかったのです。彼は、つまずいている人がいるならば、心が激しく痛むし、弱くなっている人がいるならば、自分も弱くなっています。重荷を互いに負合っているのです。ああ、だめですね、パウロは、この時点で肉を誇ることをやめてしまいました。彼は、無理やり、自分を肉を誇る愚かさを自分に貸しましたが、やはり、愛の心、気遣いの心、本来の、羊飼いが羊を気づかうような、牧者の心に突き動かされていたのです。

3B 弱さの誇り 30-33

³⁰ もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。

パウロは、11章において、このことを力説します。弱い時にこそ私は強いと言いました。弱い時にこそ、神の恵みが働くことを話します。神にこそ救いがあることは、私たちの肉体が弱い時に初めて知ることができます。キリストの恵みがあり、そこに平安と喜びがあることを、肉が弱い時に知ります。だから、弱さを誇るのです。

³¹ 主イエスの父である神、とこしえにほめたたえられる方は、私が偽りを言っていないことをご存じです。³² ダマスコでアレタ王の代官が、私を捕らえようとしてダマスコの人たちの町を見張りましたが、³³ 私は窓からかごで城壁伝いに降りられ、彼の手を逃れたのでした。

これは、パウロ以外はほとんど知らなかった出来事だったのでしょう。自分が偽りを言っていないことを、父なる神はご存じであると前置きしています。そして、パウロが復活のイエス様に、ダマスコに行く途上で会いました。そしてキリストの弟子アナニアの家に連れて行かれ、そこで、彼が祈って、パウロの目にあったウロコが取れて、目が見えるようになりました。そして水のバプテスマを受けたのです。そして、彼はダマスコで、イエスが神の子であることを大胆の宣べ伝えました。そし

て、彼はアラビアに行きました(ガラ 1:17)。そして再びダマスコに戻っています。

その時に、ユダヤ人たちは、彼を殺そうと企みました。パウロの弟子たちが、城壁伝いに籠に載せて、彼を町から出させました。ユダヤ人たちが、おそらく、その地域まで影響力を伸ばしていたアラビアの国の王アレタに頼んだのでしょう。そのアラビアの国とはナバタイ王国と呼ばれ、ペトラを首都とする国ですが、パウロの生きていた時は、アレタス四世という人が王であり、最も王国が隆盛を持っていた時の王です。あの、宝物殿と呼ばれるところは、アレタス四世の墓ではないかと言われています。彼はアラビアにいた時に、おそらくそこにいる人々にも反感を買ったかもしれません。それでダマスコにいた時に、ユダヤ人が殺そうと思っていましたが、アレタの代官に捕えてもらうべく通報したのではないかと思います。

いずれにしても、彼の福音宣教の働き、キリストのしもべとしての働きは、このような、恥ずかしいと思えるところから始まりました。負い目のあるような始まりです。キリスト者としての歩みの始まりは、私も人々に言うのは勇気がいる、恥ずかしいものです。しかし、神はそこに憐れみを示しておられ、そこに恵みを注がれ、そして福音宣教者としてくださるのです。誇るなら主を誇れ、と前回学びました。肉の誇りがいかに不自然で、愚かなことかを学べたかと思います。

箴 26:5 愚かな者には、その愚かさに合わせて答えよ。そうすれば彼は、自分を知恵のある者と思わないだろう。

20 節

Bondage:

They taught a doctrine of legalism that was contrary to the Gospel of grace.

Devour:

They “ate up” all they could get in the church; they took advantage of their privilege of receiving financial support.

Take of you:

“Take you in,” fool you. The image is that of a bird caught in a snare or a fish caught on a hook. “They baited you and caught you!”

Exalt:

They exalted themselves, not the Lord Jesus Christ; they loved to be honored and treated as great leaders.

Smite you:

This probably refers to verbal attacks rather than physical violence; the Judaizers did not hesitate to “slap them in the face” and embarrass them in public²

² Wiersbe, W. W. (1996). [*The Bible exposition commentary*](#) (Vol. 1, pp. 671–672). Victor Books.